

## 鑿音の響きわたることを

丸山 映

生まれて以来、多くの人達と出会い、多くの芸術作品に出会い感動させられた。

これからも未知の出会いがあり、おどろかされ、刺激されてゆくことでしょう。

今回は小品を並べました。

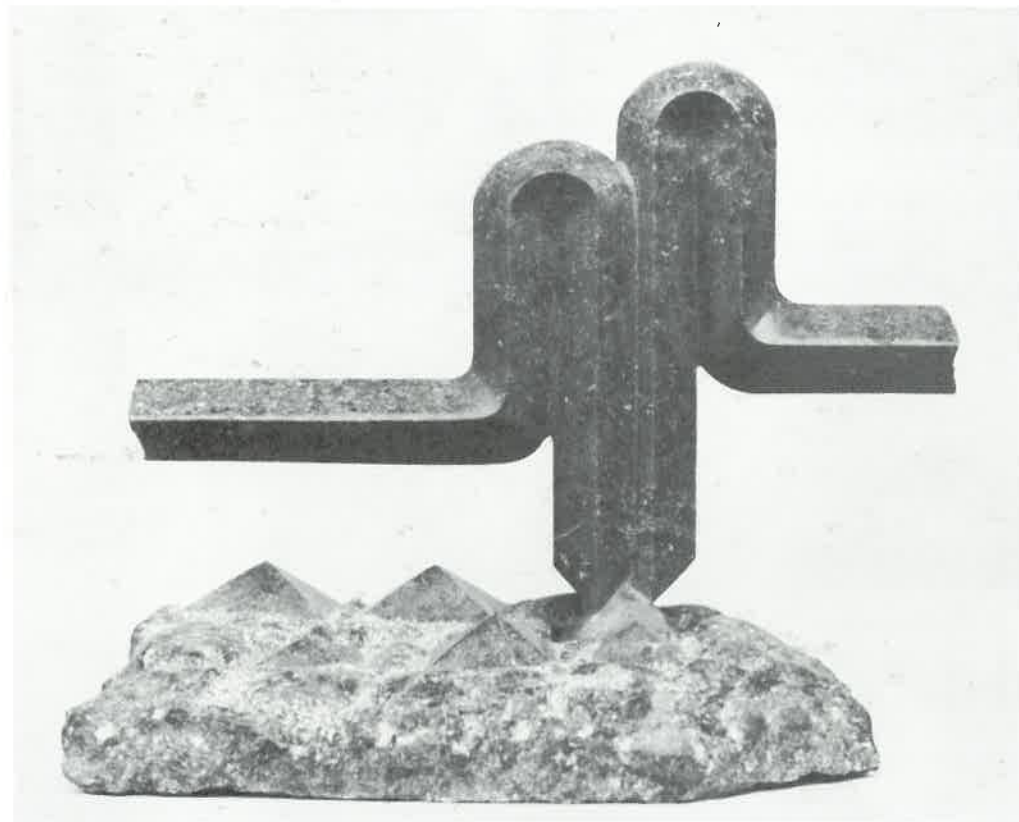
小さな作品でも屋外で制作したい。

この小さな作品のなかに鑿あとをいくつ残したかを数えている。

これが大きくなり強い光の公園に、街のなかに設置され、鑿音の響きわたることを夢みる。

素材は石である必要はないが、出来上がったものが石であったことに、いつも満足している。

そして作品は、何んであるか説明のつかないものほど良い。



風景のかたち 1981 H 50, W 60, D 40cm



### ■丸山 映 プロフィール

- 1939 長野県生
- 65 東京芸術大学大学院修了
- 66 霧ヶ峰彫刻シンポジウム招待参加
- 67 グループ刊野彫刻展
- 68 一陽会会員推挙
- 70 帯広彫刻公園石彫シンポジウム招待参加
- 75 リンダブルン国際彫刻シンポジウム招待参加
- 76 八王子石彫シンポジウム招待参加
- 78 八王子石彫シンポジウム・アートディレクター
- 80 一陽会退会
- 81 萩国際石彫シンポジウム招待参加
- 82 八王子石彫シンポジウム・アートディレクター
- 中日森の彫刻野外展招待出品
- 長良川大賞野外彫刻展審査員及び招待出品
- 84 個展 (御園ギャラリー A&A・作家村)
- 琉球大学教養部講師

## TAKUMI ART NEWS

制作発行：画廊 匠 1986年5月1日 No.1 画廊 匠 宜野湾市大山3 1 2 番地  
Phone 09889(7)7981

86企画一 丸山 映 展 5月1日(土)ー6月1日(日)(月曜休廊)

GALLERY TAKUMI

### 開廊にあたって

このたび、絵画、彫刻、陶芸、染織、写真、映像、音楽、評論に携わる者と、美術愛好者の仲間数名で画廊を開設することになりました。

壁面H250×W1800cmの手づくりの小さなギャラリーですがこのスペースが、実験的で、本格的な発表の場になって欲しいと胸膨らませています。

第一回展は、彫刻(石彫)の丸山映さんの個展です。

これまで、地方で創作することの困難さについて、いろいろと言われてきましたが、その理由のひとつは、おそらく地方での創作上の刺激の少なさということにあるだろうと思います。その意味で、私たちのささやかな試みが、制作をする側にとってお互いに刺激しあい、また観る側から芸術との無数の出会いの場となりうるか。

当面、仲間たち数名でスタートしますが、そのうち、沖縄で制作に励んでいる人たちにも参加を呼びかけていこうと、企画を練っているところです。

街中に無数の小美術館(画廊)と数多くの出会いの場を!

第一回展を機会に、ぜひご参観くださるようご案内いたします。

開廊のご挨拶に代えて。

1986年5月 画廊主宰 大浜 用光



肖像のかたち 1981 H 35, W 20, D 15cm

## 「海・石・空間」

### 翁長 直樹

かつてミニマルアートの全盛時代にアンチイリュージョンということが唱えられた。つまり、イリュージョンを一切排した作品を、ということであった。それは突出した現代美術の自己反省作用による「美術の終焉」ということにもつながった。しかしながら現在ではその誤りが指摘されて、我々の視覚は作者の意図のとおりに見えるものではないが、しかしまた作品以外一切を排して観ることも不可能であるという見方になってきた。我々は様々なアナロジーにおいて作品を観るものであり、作品は観る側の経験や記憶と重ね合わされて観られるべきものであるということなのだ。(作品は作者から独立しようということでもある。)

ミニマルアートは美術のジャンルをも曖昧にしてしまったが、そのことはしかし、芸術作品を根源的に観、制作するために積極的な意味を持った。我々はもう一度伝統的なものを見つめ直し、我々の視覚の可能性を探り出さねばならなくなったわけである。

このようなめまぐるしく移り変わる現代美術の真只中であって、丸山映は石に出会い、石にとどまり、ひたすら石の可能性を追求し続けてきた作家である。美術の最前線に出ず、自ら限定した枠内での仕事は、いかにも彫刻家らしい頑健な身体と精神を築き上げた。アトリエにこもらず、都市や自然環境の中に置かれる彫刻を、様々な作家たちとの交流の中で制作してきた。個人的な聖なるアトリエ意識を否定し、都市の空間概念の変化と共に彫刻家の空間概念も変わるべきだという「彫刻シンポジウム」の提唱者カール・プラントルに賛同し、数々のシンポジウムの企画に加わってきた。最近では、広場や公園の利用、都市計画などにも積極的に関わっている。「社会的な空間、都市の空間、そういう空間芸術としてのモニュメンタルな彫刻ということを考えている」という丸山自身の言葉に、彫刻を限らない空間の中に解放していこうという姿勢が表われている。

丸山は初期において、海のイメージをシリーズで制作している。帆や波や海景である。当時の作品を見ると(写真であるが)荒々し

く、石の物質感が前面に出ている。砥石でつるつるに仕上げた部分と石の生地の部分との関係は、緊張感をはらまず、静かに共存し、マッシブである。ごろんとした感じである。波のイメージの初期作品は再現的な表現から漸時変化し、いつしか様々な人体のフォルムを思わせる近年の作品へと移っていく。

70年代、丸山映は人体の「切り抜き」を石やブロンズで作り始める。正面から見るとまるで紙の切り抜きに見えるものが、実は厚みのある石や鉄であるという、ある種のトリックが施こされていた。それらの作品は福田繁雄の仕事を思わせるが、丸山の方が、先がけであり、より彫刻的である。これらの「切り抜き」的彫刻は、様々な可能性を孕んで、展開の兆しを見せながら中断されてしまう。

80年代に入ると丸山の作品に急激な変化が見られるようになる。今回展示される作品群がそれであるが、一言で言うとフォルムがシャープになったと言える。これらの作品群は大きく二つに――有機的なものと幾何学的なものに分けることができる。幾何学的な作品のひとつに「空白のかたち」がある。この作品には、「存在」から「空虚」へ、触覚的なものから視覚的なものへ、手ごたえのあるものからはかかないものへ、「全体」から「部分」への関心の移行が見られる。それはしかし、丸山の持つゆるやかな曲面とは全く異質とも思える。悪くいえば、いわゆる「現代彫刻」の衣をまとって見やすくなったとも言える。今はしかし、過渡期であり、そこからどのように両義的なものの追求をしていくのが、今後の課題であろう。彫刻のおもしろさは物質と形の位相のずれにあると思える。そのずれの中から意味が生まれてくる。丸山は今、その微妙なところにさしかかっている。丸山に望むのは、これまで制作してきたゆるやかな人間味のある曲面と、最近の鋭い面のある作品とをいかに切り結ぶか追求することであり、もっと多様な意味を生み出す作品を作り出すことである。

丸山映の作品はほとんど野外に置かれることを想定して制作されているため、視覚的にダイナミックなスケールを持っている。前述したように、その特質は環境彫刻にあり、それと関連して論じられるべきである。安易なモニュメントが次々と作られつつある沖縄において、丸山映は大きな役割を担っていると言えよう。



空白のかたち 1982 H50, W60, D40cm